

継続していける子育てひろばのあり方をさぐる

第1分科会

事業として、市民の自発的な集いとして、子育てひろばが各地で展開されています。元気なひろばには共通するキーワードがあるはず…。

継続していける子育てひろばにしていくには…。

活動事例からみんなで考えました。

報告者

藤本 明美 さん

京都子育てネットワーク代表、子育て支援コミュニティワーカー

大嶋 朝香 さん

フォーラム・アソシエ運営委員長、公園遊びの会「おるたん」メンバー

コーディネーター 若林 裕子 (実行委員、多摩南生活クラブ生協副理事長)

報告1

元気なひろばのキーワード

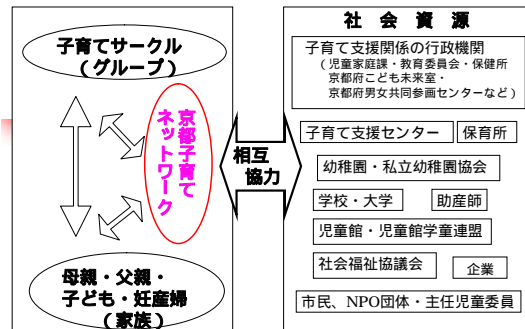
藤本明美さん

京都子育てネットワーク

【子育てから始まった地域とのかかわり】

幼稚園教諭を経て結婚・出産。初めての育児に孤立感、不安感を感じた。地域で育ち合い・支えあいの子育ての実践を見て、4人の子育ての傍ら、自らも子育てサークルを立ち上げ活動してきた。サークルの情報紙に毎日10本ぐらい問い合わせがきて、仲間と空間（居場所）と時間を求めている人が大勢いることを実感し、サークルを必要とする親の中間支援組織として「京都子育てネットワーク」を立ち上げた。サークルのリーダー交流会、サークル立ち上げの応援、親のリフレッシュ講座、情報発信、講座中の一時保育、講演や調査など行政・各種団体との協働事業に取り組んでいる。子育てサークルを核とした循環型子育て相互支援でエンパワメントし、親が育ち、子どもが育ち、地域が育つことを応援している。

1. 京都子育てネットワーク 組織構成図



【地域子育てグループにおける実態調査から】

2006年10月、京都市内210の子育てグループを対象に「子育て広場が仲間と出会い、支えあい、学びあう場、そしてみんな大切な子どもといえる場になり、次世代を担う人づくりになっているか」アンケート調査を実施（回収数2,769枚）。

<見えてきた課題>

- ・信頼できる仲間がづくりにくいこと
- ・1～2歳の子どもの発達上の特性をトラブルと捉えて悩むケース
- ・参加しても話し合う相手がなく、孤立する

<評価、注目すべき点>

困ったとき支える仲間ができた = 37%
自分の気持ちを話せる仲間ができた = 35%。

リーダー・スタッフをやってみたい人 = 20%。

満足度 = 60%。(成長できる、仲間ができそう、生活に張りが出そうと期待し、やってみた人は親しい人ができた、自信ができたなど)

*この結果からも「お客さん」でいるより役割があるほうが満足度が高くなるのが分かる。

【広場の運営】

広場ではイベントの企画を参加者みんなで練り、飾りつけや出し物、料理、買出しなど得意な分野で参加してもらい、ひとつのものをつくり上げる楽しみを共有するなど工夫している。



藤本明美さん

< 質疑 >

Q：広場参加者の仲間づくりのコツは...

A：ちゃんのお母さんでなく、その人が今までやってきたことなど、さまざまな話題でその参加者自身に焦点をあてる。親同士から出会うという試みを保育つきで開催したり、手作業でコミュニケーションをとるなど工夫を。

Q：場所は...

A：児童館など既存の施設を使っている。

Q：広がりをつくるには...

A：参加者にチラシを配ってもらうなど、口コミが大事。

報告 2

公園遊びの会「おるたん」の实践から

大嶋朝香さん

フォーラム・アソシエ運営委員長

公園あそびの会「おるたん」メンバー

【あなた発のネットワークづくり応援団】

生活クラブ神奈川では自発的、主体的活動を応援するために、「フォーラム・アソシエ」を開設。食・子育てをテーマとしたコーディネーター育成講座、ファシリテーター育成研修などの「アソシエーション講座」や英会話講座、アサーティブトレーニングなどの「一般教養講座」を開催している。講師の登録やアソシエーション活動発表会、アソシエーションづくりのコーディネイトなども行っている。また日ごろの活動企画、イベント情報・メンバー募集などの情報は、登録者にマールマガジンやファックスレターで発信。広く情報を伝えたいときにはフォーラム・アソシエ専用のホームページも活用できる。



【いつもの公園...みんなで遊べばコワくない】

公園あそびの会「おるたん」はフォーラ

ム・アソシエ主催の公園子育てサポーター養成講座修了生(2006)により結成された。子育て中の母親が中心で、乳幼児親子の外あそびを応援するため、3年前から新横浜第一公園で月1回公園あそびの会を開催している。布に手書きしたのぼりを立てて、活動が始まる。受付、申し込み、プログラムなし、参加自由。親子で遊ぶ。毎回20組以上の参加がある。スタッフは場を用意し、1時間半ぐらい一緒に過ごす。戸外に子どもが自由に遊べる空間を用意することで、子どもは五感を刺激され、親は子育て仲間と出会い、ほかの子の遊ぶ様子を見て、育ちの多様さを知る。また子どもたちが遊んでいる様子が地域の人々の目にはいることが何よりの子育て支援になり、子育て環境の整備につながると考えている。がんばるママのごほうび講座や森の幼稚園など、活動が広がっている。



向かって左が大嶋朝香さん

< 質疑 >

Q：雨の場合は...

A：朝9時に雨が降っていなければやる。

中止したのは、3年間で1回のみ！？

Q：スタッフの継続は...

A：積極的な参加者に声かけ。子連れで毎回来る感覚でOKと声をかけている。

Q：生活クラブの施設での活動は組合員外は参加しにくいのでは...

A：オルタ館はもともと地域の人が使う施設として位置づけられている。

会場参加者も含めての討議の内容

地縁も血縁もない地域での子育て、地域のコミュニティは崩壊、少子化で子育て中の人と出会う場がないといった社会状況に危機を感じ、行政の支援もない中で、地域でひろばをつくろうと奮闘している様子や課題を共有。また広場の参加者がお客さんになりがち、資金や場所の確保ができない、次の担い手がなかなか見つからないなどの課題解決に向けてのヒントを出し合った。元気なひろばの様子に、これからチャレンジしようという地域からは参考になったという声や以前に福祉事業交流会で先行事例を聞いて思いが膨らみ、自分の地域で実践したといううれしい報告もあった。

全体を通して分科会の討議の成果（確認されたこと・可能性・今後の課題など）

元気な広場に共通するキーワードは「仲間・相互支援・誰でもできる・気軽にできる・身近な人でやる」。今やっている人が輝いているのを見て、自分もやってみようと思ひ、リーダー・スタッフなどの役割を引き受けていく。担い手の元気が参加者の元気になり、地域に広がっていくことを共有した。

ひろばの資金、場所の確保にむけては実績を積み、アピールし続け、政策的なチャンスをつかむこと。自治体や民間の助成金を活用することも大事と確認した。

《記録》池座俊子(実行委員。東京ネット)

《参加者》29名

保育事業の多様なあり方

第2分科会

一時預かりやグループ保育、病後時保育など…多様なスタイルの保育が今必要とされています。しかし、事業として成り立たせていくには、行政との連携やスタッフの確保など工夫がいるのが現状です。生活クラブ運動グループにも取り組みが期待されている多様なスタイルの保育について、実践報告を受けながら考えていきました。

報告者

友沢 ゆみ子 さん

NPO 法人ピッピ親子サポートネット

小川 京子 さん

NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズ代表理事

子育て支援ワーカーズ プーのいえ代表、保育士・幼稚園教諭。

コーディネーター 谷 嘉子 (実行委員。2009年4月より生活クラブの子育て事業スタッフとして保育園ぼむ、子育て広場ぶらんこの事業推進に取り組む。)

報告1

多様なニーズにこたえて事業をつくり、制度を変える

友沢ゆみ子さん

NPO法人ピッピ親子サポートネット

【これまでの流れ】

横浜市青葉区は若い世代、転出入が多く、子育てに孤立している人が多いまちである。90年代後半よりワーカーズ・コレクティブによる認可外保育室の運営、2000年から、障害児を持つお母さん達が声をあげ、「子どもミニデイサービスまーぶる」がスタート(W.Coパレット)した。多様な保育ニーズ

に応える小規模な保育室の制度への位置づけを目指し政策提案を続けてきた。

2003年に、150坪の土地の提供の情報があり、デイサービスやまびこ、まーぶるに関わったメンバーなどで高齢者グループホームと認可保育園の併設施設を作る計画がスタートし「市ヶ尾みんなの家」が開所した。NPOでも小規模でもよいという規制緩和の時期で、NPOをつくって保育園を受託する準備、建物の建設、ワーカーズづくりを同時進行で行った。建物の中には保育業務、給食業務、グループホームのワーカーズがはいっている。現在の認可保育園の入園の条件(就労要件)では、本当に使いたい人の役に立っているのだろうかという疑問が残ったが、今までの経験からも保育園の経営は苦しく、適正な対価が払われるこ

との必要性もあるので、これから自分たちで認可保育園を実際に経営してみたら認可保育園の制度を変えていく提案をしていこうという事になった。

【横浜市認可ピッピ保育園の概要】

認可保育、一時保育、そだんの日、施設開放、育児講座などの地域向けの企画を行っている。休日保育を他の NPO と連携し行っている（お正月三が日以外は開園）。

【となりのいえ誕生】

ピッピ保育園は開園当初から障害のある子どもが入園しており、相談ケースも多数あった。その子ども達が卒業し、障害児も受け入れられる学童保育の必要性から2006年に寺子屋・フリ・スペース、学童保育のある「となりのいえ」が誕生した。2007年には横浜市障害児放課後居場所作り事業に申請、現在はピッピ学童保育と障害児の放課後の居場所が隣り合わせで共存している。

2008年からは産前産後・チャイルドケア派遣事業を行う「ヘルパーステーションみんなのいえ」の事業を開始。デイサービスとのコラボレーションで行っている。子どもを連れて出て来られない人が本当は問題なのである。

【制度を変える取り組み】

このように自分たちが必要と思う事業を起こしてきたが、自分たちの力では限界がある。制度としてできるよう、また使う側にあった制度なのか、現場で発見したニーズと、制度とのミスマッチを変えていくという、社会を変える運動にしてきた。特に多様なニーズに応えられる一時保育の充実のために制度化の必要性を感じ、提案をしている。

【働くことの価値を高める】

現在、みんなのいえ、となりのいえでワーカーズが4つ、スタッフ約70人、法人全

体の事業高は1億3千万円である。福祉の労働の対価に目標を持つということ、年収300万、時給1,000円を目指そうといている。また、パーセントワークのしくみをつくり、例えば子育て中の方は70%の労働で社会保険をつけられるような仕組みをつくっている。



(質疑)

((企) W.Co ていんかあべる) 大沢さんより

Q: スタッフが足りずまたスタッフへの教育も難しい。どのようにして賛同する人を増やしたのか?

A: 最初のワーカーズをつくる時には一般にも募集し説明会を開いた。立ち上げをするところは無償でおこなうが、それが楽しい。その後も学びの場を設けるようにする。となりのいえの時は初めのメンバーが呼びかけたが、テーマが違ふとまた集まってくる人が違ふ。大事なことはできるだけつくる過程に参加してもらうことである。

(NPO 育児サポートあっぷの会) 川島さんより

Q: 働き方が課題で辞める人が多い。スタッフで常勤は何人ぐらいいるか、年代は?

A: 新卒や20代の保育士が5人ぐらいいる。30~40代中心である。

(W.Co ちろりん村) 吉田さんより

Q：事業高について、一番利益を上げているのは何か？パーセントワークの仕組みは？

A：認可保育園が一番である。障害児放課後居場所作り事業はトントンの。学童保育は独自事業でマイナスで家賃を払えない。ヘルパーステーションは常勤を置かなくてはならないので全くの赤字である。パーセントワークとは月 160 時間労働を 100%とすると 120 時間労働で 75%。単価は同じで毎日来る場合、120 時間以上働けば社会保険がつくという働き方である。

報告 2

おとなも子どもも心豊かに暮らすために

小川京子さん

NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズ代表理事

子育て支援ワーカーズ プーのいえ代表

【NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズについて】

地域の 4 つのワーカーズが協働することから始まった NPO 法人である。NPO 法人が当てはまるかどうか疑問があったが、2 年の時間をかけて学習し、納得した上で 2002 年 4 月に NPO 法人格をとった。

事業は 1 . 親を支える事業(とんとん広場、とんとん図書室) 2 . 遊びを伝える事業、3 . 子育て・子育て支援を学ぶ事業が 3 つの柱である。1 は参加費が 300 円、多いときで 20 組ぐらい、人件費は出ない。1 ~ 3 の事業は収益が上がらないためそれを支えるために委託事業などを行っている。3 の事業は、子育て支援のスタッフを広げること

に繋がっている。

【子育て支援ワーカーズ プーのいえについて】

事業内容は、出張保育事業、コミコミ・かふえ運営など多岐にわたっている。保育事業や遊びのひろばの活動の拡大、NPO としての活動を広げるなど、9 年目に夢で掲げたことが 16 年目となった今実現している。私たちが何をしたいのか、夢を言葉に出すことが大事だと感じている。

【お母さんの状況とその変化】

とんとんひろば、プーくらぶ、個人保育などでお母さん達と接している経験から、育児力をつけることが大切だと感じる。子どもよりお母さんのサポートが必要である。信頼して話してもらえような関係づくりが必要である。

【子育て支援で大切な事】

今まで何事も無く進んできて、初めてぶつかる壁が子育てである。また、人とのコミュニケーションが苦手なお母さんが多くなっている。保育士をしてきた人はどうしても「指導」になりがちで、教えようとしてしまうが、そうではなく、その心情や大変さに寄り添いながら、子どもの育ちを喜び合える関係づくりが大切。アドバイスをするならば、ひとつのことを提示するのではなく、3 つ以上選択肢を出して選んでもらうことがポイント。子育ては母親だけが担うものではなく、たくさんの人の中で子どもも育っていくものである。「母たるもの」がまわりにたくさんいてもよいだろう。15 年間ワーカーズで仕事をしてきて「人が宝物」だと感じる。大人も子どもも心豊かに暮らすために、家族以外の人とのかかわりを持つ環境を地域につくっていききたい。(質疑)

(保育室モモ) 貞末さんより

Q：働くメンバーで価値観の違いが出るのはどうしたらよいのか。これだけ大きい組織になると、事務方の仕事が大変だと思いがどうしているのか。

A：4 つぐらいまでの団体の時は大丈夫だったが、5~7 団体が協働するとなったとき NPO って何?と考えるための何か仕掛けをしないといけないと思った。活動は全てプロジェクト制で行っており、各ワーカーズから一人が出てリーダーを決めて行う。するとこれが NPO の協働なのかと身をもって分かる。150 人のメンバーが、自主の仕事のほか NPO で違う空気の人と話す。自分のワーカーズで解決できないときは他の団体にアドバイスをもらうことができる。

事務の仕事は必要なので、できる人を捜し事務体制を整えた。週 3~4 回で手当てをつけている。プロジェクト参加の時は「活動」なので交通費のみが出る。対価をもらうのは「保育」をした時である。

(アビリティクラブたすけあい) 香丸さんより報告

17年前から在宅支援サポートをしているが母親のコミュニケーション能力が低下しているとともに家事ができない人も増えている。広場にも来ず、家にいる人が問題だと感じる。そこで家に出向いていくサポートが東京でも広がっているという事をお伝えしたい。

A：家事援助はプーのいえではたすけあいワーカーズを紹介している。家にこもっている人をどうするかがやはり問題で、出向いていく事もしている。保健所、行政サイドとつながりを持っている。

(VAIC コミュニティケア研究所) 佐々部さんより

Q：一人親のサポートの事業を 2 つしているが委託費はいくらか？

A：後日調べて回答する

(W.Co くるみ) 酒井さんより

Q：一人親とは父子家庭も入るのか

A：母子家庭、父子家庭を「ひとりおや」と呼んでいる。ヘルパーの資格を持っている人が行っている。法人として契約している。

会場参加者も含めての討議の内容

香丸さん：働く人材がない。家事介護は特に厳しい。子育ての分野は人が来てくれるのか？

ピピピ施設長：保育園では認可をもらっているで資格を持っている人が基準の人数は必要である。一時預かりなどは無資格の人でもできる。初めは無資格でもその後資格取得を目指している。

小川さん：働きながら例会でワーカーズのよさを伝える。「ひばりの会」という楽しむ会を設けている。組織の中で役割を担う経験をしてもらったり、ワーカーズをはじめよう集会をしたりする。一般からも募集しているが、紹介でくる人が多い。

川島さん：保育士の有資格者は自負心が強く無資格の人と対立する。しかし無資格で預かる院内保育の場で、もっと専門的なところがよいと言って辞めていかれた事を最近経験し、質の向上も必要ではないかと思っている。

小川さん：一時預かりなどは本当はむしろ技術のいる仕事である。保育士はどうしても「指導する」と言う態度をとってしまいがちである。寄り添うことを忘れないようにしたい。

全体を通して分科会の討議の成果（確認されたこと・可能性・今後の課題など）

参加者の所属する保育や介護関係の団体が困難としていることの共通点が浮き彫りになった。それは、働く人材集めや、働く人の価値観のずれがあるときどう一つにまとめていくかが大変であるということ、自分たちだけでやれる事には限界があるし、かといって制度を利用すると逆に利用者にとって使いにくいというミスマッチもあるということなどである。

発表した2つの団体は実に活気があり、仲間が増え、仕事の内容が広がっている。そこまでに広がったのは、納得がいくまで学びやていねいな話し合いを重ねていること、自分たちのしたいこと、必要と思うことを声に出していくこと、そしてニーズを示しながら制度を変えていく働きかけをしていくこと、などがポイントのようである。また、子育て支援の現場では保育の質の向上とともに、支援する側が「指導者」にならずお母さん達に寄り添うような関係づくりが大切である。大人も子どもも心豊かに暮らすために、地域に人と人とのかかわりを持つ環境をつくっていくことの大切さを再認識した会になった。



小川京子さん

《記録》浮田理香(実行委員。保育園ばむ)

《参加者》33名

高齢者福祉と子育て支援の コラボレーション

第3分科会

生活クラブがこれまで先駆的に取り組んできた高齢者福祉の取り組みを子育て支援にも活かしていけないか、高齢者と乳幼児との交流など今後の可能性も含めて考えました。

報告者

北島 明枝 さん

風の村保育園 園長

高井 浩子 さん

特定非営利活動法人 江東まちづくり研究舎 理事長

1992 年生活クラブ加入、生活クラブ江戸川支部共済委員、ACTへ加入

1996 年江東区へ転居、生活クラブ江東支部支部委員、江東ネット、江東まちづくりの会、難病ボランティア江東の会で活動

NPO法人江東まちづくり研究舎設立にかかわり 2007 年より理事長、

みんなの家で生活相談員と介護職を兼任中

コーディネーター 浅川 悦子 (実行委員。23区南生活クラブ生協理事長。子育て広場ぶらんこの事業実行チームのメンバーとして立ち上げに関わる。高齢者交流会ひこばえのメンバー)

報告 1

高齢者福祉施設「風の村」と保育園の 関わり

北島 明枝さん

風の村保育園園長

【保育園開設の経緯】

2002 年 5 月に社会福祉法人の職員・生活クラブの組合員・地域の人や保育士経験者などが集まり、どんな保育園にしたいかを話し合いながら事業計画をたて八街市に提出した。その後市の次世代育成支援対策行

動計画に私立保育園設立方針が決定し、市からの依頼を受け 2007 年 4 月に開園した。

【園の概要】

0～5 歳児まで現在 63 名(障がいを持った児童も含む)、通常の保育のほか 乳児・休日・一時・延長保育もあり、地域子育て支援センター「風の村」も併設している。

落花生畑が周囲に広がる自然豊かな環境の中にある。

【園の理念】

「心で感じ、身体で感じ、考える力」を育む。自然を生かし、好奇心と感性を養う。多くの人とのかかわり会いいろいろな人が

いることを知る。生活を通し自ら学ぶ。

【園の特徴】

自然・創造と想像・交流・養育者と共に大切にしたい保育を考えている。

自然の中で五感を働かせ、様々な人と触れ合い交流し、経験を重ね、自分の痛みも人の痛みも知る心が育つ自然態の「生活の場」としての保育をしている。

【特別養護老人ホーム「風の村」との関わり】

保育園からトト口の道の様な竹林を通り5分くらいのところにある。4・5歳児が年に7~8回訪問して歌やダンスを披露したり、あやとり、お手玉遊びをしたりしている。

【デイサービス「風の村」との関わり】

園の隣地に「風の杜ひろば」がありそこへ0~5歳児が週に2~3回遊びに行く時に会話を交わすなど自然体でかかわっている。

【その他】

・風の杜ひろばではヤギの親子を飼っており、ひまわり畑や様々な草花・虫探しなど季節の風を感じる遊び場がある。季節の行事や秋まつり、園の運動会などに高齢者の方をご招待したりの関わりもある。

・無理をせずに自然態のお付き合い(日常的に会話を交わしながら遊びが広がるなど)をお互いに大切にしている。つかず離れずの関係、高齢者の方にとってはまわりに子どもの声がすることがリハビリになっている。お互いが必要とされている存在になっている。子どものなかにお年寄りを大切にするなどの思いやりの気持ちが生まれ、いつか心豊かな部分につながればと思っている。(行事の時の関わりの様子や、日常的な会話のやりとりなどが紹介された。)

(質疑)

Q：スタッフは何名？

A：正規保育士・不正規・厨房含めて21名。

Q：障がいの方への対応について・・・

A：どんな方でも受け入れるという園の方針で八街市ではじめて全盲のお子さんを預かった。その保護者の方が(園が受け入れたことを感謝し)市や県に交渉して年間50万の補助金を得られるようになった。看護師が来ている時に登園するよう、保護者と協力しながらやっている。



北島明枝さん

報告2

私たちが描いた夢 地域に密着した共生ケアとは

高井浩子さん

特定非営利活動法人・江東まちづくり研究舎理事長

【開設経緯】

下町・江東区にも高齢化が進んでいるが、子どももいる。その中で地域に根ざした暮らしで何が必要とされているかを考えていった。エッコロをバックボーンに、地域の中に「たすけあい」を組合員外にどう根付かせるか地域福祉の在り方を検討し、富山の惣万さんの「共生型ケア」に行き当たった。地域に起業し利用者も働く人も地域の人、地域でお金を回す、をコンセプトに、地域が必要とするものをつくっていかうと「惣万さんの講演会」開催を区報で広くよびか

け、多くの人が集まった。「地域の中で共生型ケア」を目指す起業の想いを持つ人々でワークショップを開き、目指すもののイメージをつくっていった。

2005年12月15日にNPO法人「江東まちづくり研究舎」設立総会を開き、NPO法人として東京都へ申請し、翌年4月に認証を受けて「みんなの家」開設にいたる。

【事業開始】

マンションの1階90㎡のフロアを賃貸（ランニングコスト：月20万・駐車場月5万）で契約し、開所まで、苦勞を含め楽しい時期だった。

【事業内容】

契約をした人を対象に、一時預かり・障がい者も受け入れ、高齢者のミニデイサービス（利用者10割負担）自主事業をしながら、介護保険に参入し事業の安定化をはかっている。（「みんなの家」の日常の様子を資料を使って説明。認知症の高齢者と幼児の寄り添い、高次機能障害を持った方と子どもの穏やかなつきあい、末期がんの高齢者がなくなる5日前まで「行きたい」と言って通われた例など）

10名小規模の施設で、常時5人のスタッフを配置している。外からの身守りが必要と、大勢のボランティアも受け入れて食事づくりや車運転などをしてもらっている。

【コンセプト・ミッション】

だれも断らない、友達の家遊びにしているイメージで（プログラムも持たず・名札も付けず・送迎の車にも名前をつけない）預ける理由も問わない。＜通う＞＜泊まる＞＜暮らす＞機能を持った地域共生型小規模多機能施設をめざす。

【その他】

共生ケア施設として、江東区の係長職の

職員研修を受け入れている。縦割りでない共生ケアの先駆けとなっている。実績を積むことで、後に続く人が出てくることを望んでいる。

【課題】

先日都の検査があり、消防法に引っかかることはなかったが、泊まる機能は、スペースが十分ではなく現状では実施できない。（質疑）

Q：当初ワークーズを目指していたが・・・

A：ワークーズという形態で合意形成が難しかった。現在、NPOとして民主的な運営ができています。生活クラブ運動グループの一員として活動している。同じ情報の共有は大切にしている。

Q：ボランティアの関わり方は・・・

A：接骨師会・傾聴の会・福祉を勉強している人・地域協議会から組合員がメイクセラピーでかかわっている。

Q：ワークショップでつくっていかこうとするモチベーションの持って行き方は？

A：集まってきた人は、情報や人材をゲットしようという意思が高く、同じ様な会合であり、おなじみになっている。地域密着型の共生ケアで最後にまとまった。

Q：資金の問題は・・・

A：助成金を集め、寄付等を集め必要な経費の半分を集めた。ランニングコストは厳しいが、半年したら介護事業で廻るようになった。初めは無給だったが、作年から少し役員報酬がもらえるようになった。



高井浩子さん

会場参加者も含めての討議の内容

・高齢者と乳幼児の交流の持ち方について、西東京・ぼむの例から・・・デイサービスに子どもたち(0~2歳児)を連れていくのに、予定を立てていないと行きづらく、またタイムスケジュールが決まっても、子どもたちが泣き続ける場合もあり交流を持つのは難しい。

高井さん：手遊びしようとカリキュラムを一緒にやる感じ、自然の流れで、家庭の延長線で過ごしている。泣くときはおんぶするとおさまる。定員に対して、スタッフ体制がしっかりと配置しているからできる。

北島さん：お友達のうちに遊びに行く感覚、日々の関わりの中から生まれてきている。日常の中に、お年寄りがいる、融合・環境づくりが自分たちの仕事。「今日一日を楽しくすごした」というケアをめざしている。高齢者施設の施設長と保育園の園長の考え方が違うとうまくいかない。コミュニケーションは大事。

全体を通して分科会の討議の成果(確認されたこと・可能性・今後の課題など)

・地域の中に子供からお年寄りまで、障がいのある人も含めてみんながいることが当たり前のこと、自然なこと。縦割りでなくごく自然体で過ごすことが、子どもたちに

もお年寄りにも必要なこと。お互いが必要とされている。子どもはいるだけでボランティア。

・家族が一日住んでいるように過ごすこと、友達の家にいるようなデイサービス、地域のなかに小さいけれど、だれも断らない居場所を地域が一体となつてつくっていくことが望ましい。地域は一つのおおきな家族。
・複合施設とどうコラボできるのか?自然に必要なだからやっていく。

・制度を使って実績を積むことで行政を動かすことができる。チャレンジしていこう。

・埼玉のワーカーズの方から：介護施設とのコミュニケーションスペースをやりたいと進めている。お年寄りと子どものふれあい、親の世代の絡みも必要と考えている。

・子育て中で仕事をしていない人の居場所が一番ない。気持ちがりラックスできる・気が楽になれる場が必要。



《記録》朝倉順子(実行委員。多摩きた生活クラブ生協副理事長)

《参加者》29名

若者就労支援

第4分科会

生活クラブ生協・東京の地域福祉政策では、仕事を
得て社会に巣立っていくまでを子育て支援と考えて政
策を立てています。
生産者やワーカーズ・コレクティブとのネットワークを生
かして取り組んでいけることがあるのではないかと……。
この分野での先駆的な団体の報告を受けながら、今後
の展開について考えました。

報告者

工藤 啓 さん

NPO 法人「育て上げ」ネット理事長。

内閣府「地域における若者支援のための体制整備モデル事業中央企画委員会」委
員、文部科学省「実践型学習支援システム推進委員会」委員他就任。

『16 才のための暮らしワークブック 生きていくのにかかるお金は月いくら?』(主婦の友社)
他多数

利根川 ^{あつし} 徳 さん

NPO 法人ワーカーズコープ東京中央事業本部事務局長 / しんじゅく若者サポートステ
ーション・せたがや若者サポートステーション所長

約20年間、テレビCM制作会社でプロデューサーとして、広告制作の現場に。思うとこ
ろがあり転職を考え、2007年よりワーカーズコープに入り東京事業本部事務局員とし
て情報・広報関係の業務に携わる。

横田 惟一郎さん

2008年8月より、しんじゅくサポステを利用。

2008年10月より、ワーカーズコープの事業所(いきいき森川)にてアルバイトをはじめ、今日に至る。

コーディネーター 柳本 悦子(実行委員。東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合理事長。)



報告 1

工藤 啓さん
NPO法人「育て
上げ」ネット理事長

報告内容

1. 団体説明
 - ・立川市を拠点に5箇所で行っている若者就労支援事業を行っている。
 - ・年間事業高2億円 職員60名
 - ・中学校へのキャリア教育支援も行っている。定時制や2部制、偏差値は高くない学校。生活環境に問題のある子が多い。
2. 社会状況

小・中学校で学校へ行けない子が13万人くらい。それぞれ理由がある。高校を中退する子が8万から10万人、大学・専門学校の中退が14万人。34万人が学校から脱落している。中途退学者は一般の就職が難しい。若者の3人に1人が非正規雇用、5人に1人が年収200万円以下、4人に1人が貯金0。政策からも見捨てられている。若者とは、15歳から34歳(法的な決まりは無い)。最近では39歳までと言われる。基本は雇用対策なので、年金受給資格(25年間払えるか)を考えて年齢を決めているようだ。このところ生きるための犯罪が増えてきている。若い人が仕事をするということは治安・社会保障(年金)問題。本来税金を払う側としての若者が、生活保護として税金をもらっている。日本は若者への支援が減っている稀な国。

3. 団体の活動

「育て上げ」ネットのプログラムは保護者からお金をもらう。6ヶ月から2年で、修了者の9割以上が就職している。就職することは簡単だが、仕事を続ける事は難しい。しかし、9割以上は働き続けている。最初、生活保護の方がお金がもらえる。若い人が働き続けるのはスキルや知識だけではなく、3つの場所とお金を使う理由が必要。3つの場所とは、自宅・職場・仲間と楽しめる場所。いわゆる秋葉系の人たちは働いてしっかり稼いでいる。お金を使う理由をつくることはとても大切で意味がある。

20~30代の自殺はウツが多い。子どもとのかかわりの少ない親、外とつながっていない親が多い。相談に来る時も、母親1人が7割、母と子が2割、父親が来

ることは1割以下。現代は特別な子だけが人間関係が苦手なのでは無い。子育て支援について違った視点が必要な時代ではないか。



報告2

利根川 徳さん
NPO法人ワークス
コープしんじゅく若者
サポートステーション
所長

報告内容

1. 団体説明

- ・働く人の協同組合・労働者協同組合(労協)からワークスコープは設立された。
- ・もともとは国の失業対策事業から始まっている。現在は介護保険事業をはじめとした福祉関係の事業も広く行っている。

2. 団体の活動

なぜ労協が若者支援を行うのかといえ、働くことに価値を置く団体だから。働くことで人が成長していく。就労支援事業に最初から理解があったわけではない。個人の問題ではなく、働くことが厳しい社会になり派遣や非人間的な仕事を強いられ社会の問題であることがわかって取り組みが広まった。

働く中での成長・発達とは、繋がり支えあう働き方とは？

三つの協同の考え方。これがないと若者支援は難しい。自分たちの働き方も問われる。なかま 利用者 地域
この3つの協同・総合相談窓口

<若者サポートステーションとは>

資料が添付されていますが、厚生労働

省の委託事業。基本は相談を受けて支援プログラムに繋げていく。全国に92箇所、東京には5箇所あり、そのうちの2箇所をワーカーズコープが行っている。2007年から始まり3年目。15歳から39歳の人が対象。親からのアプローチが多い。本当に困難な人は相談に出てくることができない。ハローワークやジョブカフェは仕事の紹介はするけれど、一緒に伴奏者として支援してくれるわけではない。サポステでは面談を大切にしている。信頼関係をつくることが大切。コミュニケーションに問題点のある人でもセミナーなどを実施し、サポステのなかで人間関係ができてくる。その中でも就職までいけるのは3割あればよい方。困難事例がサポステへとなくなってしまうケースが増えている。今後は一般就労が難しい人の受け入れ場所づくりなども考えていきたい。

3. 利用者である横田さんの報告



新宿のサポステを利用して1年2ヶ月。現在はデイサービスでアルバイトとして仕事をしている。まだ大学に在籍しているが今年中退する予定。

高校で不登校となったが卒業できた。大学で引きこもって1年弱、新宿のサポートステーションに行き、公園の清掃に行った。日雇いにも1・2回。今までアルバイトをしたことがなかった。デイサービスには半分は職場見学としていった。職場の雰囲気が入った。でも、8時

30分から5時30分まで居続けるのは重労働だとおもった。最初は短時間のアルバイトから初めて、今は週4日位働いている。

自分自身の身の回りのこともできていなかった。お金を使うことに対して欲求がなかった。今は街を歩く時間が楽しい。意外と自分が欲しいものが分かっていた。貯金も増やして、資格も取ってみたい。自分でお金を稼いだことが無かった時は、お金を稼ぐことが汚く見えていた。お金が汚いのではなく使い方で決まる。お金の使い方にも人格が出ることも分かった。失敗も成功も含めて実感できることが大切。

会場からの質問・意見

(意見) 千葉のワーコレ風車 30代になるとなかなか就職ができないので仕事を立ち上げよう、そのまま働ける場所を作ろうとつくりました。当事者の親と本人だが、本人は働けない人もいる。親の会に力を入れている。仕事の内容は、リユースの食器の貸し出し。食器を回収して洗う仕事。働いていると生き生きしてくる。できる仕事からする、居場所付の仕事、仕事付の居場所。

Q：23区南組合員 工藤さんに質問。プログラム終了後90%が就労というが、どうしてそれができるのか？カリキュラム途中でやめていく人に対してはどうするのか

A：受け入れ時に就労できるかを見る。無理な人にプログラムを押し付けても、お金と時間の無駄になるから。また、クライアント(親)を裏切ることになる。病気の再発、障がいなどで途中でやめる

人もいるが、経済的理由の方には国の事業（若者サポートステーション）に移っていただく。面談で判断している。

Q：工藤さん、利根川さんに質問 就職できない若者がいる。やっと仕事できたが、来なくてよいと言われてしまった。どこに相談できるか。

A：利根川さん サポステから民間の事業所を紹介することもできる。

A：工藤さん 民間のプログラムなので有料となるが、その分何でもできる。

国の事業は無料だができないことがある。育て上げネットでは本人が出てこれるところまで支援する。

A：利根川さん 若い人のホームレス、軽度の発達障害など障害者手帳が取れない人が企業から締め出されている。軽度の障がいの方など社会的に就職が無理な方のためのプログラムをつくる予定。

Q：まち砦組合員 中・高校生向けにプログラムの出張を行っているとのことですが、反応はどうですか。

A：工藤さん カードゲームとワークショップを組み合わせで行っている。外から大人の人が入ることで先生にはウケる授業です。生徒の家の状況が見えないプログラムですが、社会の本当を理解する現実に即したプログラムになっています。

（感想）練馬組合員 感想です。60歳になって、自分は引きこもりだと思っていたが振り返ると引きこもっていたと思う。今、やっとしゃべれるようになって。若い時に子どもに声をかけてあげれば元気になる。若者はつながりができなければ元気になれるのでないか。

Q：西東京組合員 息子が3年間不登校だった。横田さんの話は自分の息子のこ

とのように聞いた。欲しいものが無いということ、それでも満足している。お金をもうけることが汚いと思っている子どももいる。人の目を見て話せない。電話やインターフォンに出られない。友人はバイトや大学に行っている。まちを歩いていて、一番嫌いなのは自分自身だと言っていた。親としてどのようにかかわるのがよいのか。

A：工藤さん 嫌いも自己愛がねじれているだけ。好きなものを薦めて、受け入れられなくてもきっかけにはなる。アプローチは続けることが必要。本人がそのためにはお金を使いたいとおもうようになるかもしれない。

分科会で確認されたこと

若者がおかれている社会状況を確認できた。若者サポートステーションを実際に利用して就労に向けた活動を始めている横田さんのお話を伺うことで、働くことには、お金を使う理由が必要ということも実感として理解することができた。

引きこもりがちになった子どもに、親はあきらめずにアプローチを続けることの必要性もわかった。

《記録》石塚芳恵(実行委員。NPO.ACT)

《参加者》24名

ノーバディーズ・パーフェクト 講座を体験する

第5分科会

カナダの子育て支援では、ノーバディーズ・パーフェクト = 完璧な人なんていないというプログラムが実施されています。ファシリテーターの進行のもと、身近な仲間とワークショップ形式で学びあう親支援のプログラムです。

ノーバディーズ・パーフェクト講座の意義を学ぶとともに、体験してみました。

ファシリテーター

福川 須美さん

駒沢女子短期大学保育科 教授

駒沢女子短期大学で、30年以上保育者養成に携わっている。専門は家族社会学。

日本社会が子育てにやさしい社会になるよう、NPO 子ども家庭リソースセンターの一員として、カナダの子育て家庭支援プログラムから学んだことを活かす活動(ノーバディーズ・パーフェクトプログラムのトレーナー、父親支援者養成等)を行い、生協の子育てひろばの普及、スタッフ研修等にも努力してきた。

共著として『家族援助論』ななみ書房、『世界に学ぼう！子育て支援』フレーベル館など。

司会 田中 且枝 (実行委員。多摩きた生活クラブ生協理事。)

《参加者》 11名

《記録》岡部 和代(実行委員。北東京生活クラブ生協理事。)



講座体験の前に子ども家庭リソースセンターの福川須美さんから、まずカナダ生まれの親支援プログラム『Nobody's Perfect』（ノーバディーズ・パーフェクト）とはどのようなプログラムなのか、資料を使って説明があった。

<カナダの子育て事情>

・共働きが多い、離婚による母子家庭増加と貧困層が多いため子育てに困難を抱えている親も多い。若年、一人親、経済的困難などで親が孤立しないような子育て家庭支援を行っており、親の学習プログラムとして『Nobody's Perfect = 誰も完璧ではない』が使われている。

・子育ての基本はほめて育てること。一人ひとりの価値を認めてよいところを見つけてほめることにより自分に自信が持てるようになることが大切。

・このプログラムでは親同士、お互いがお互いの資源となり認め合い学びあうことで自分もしっかりと自信を持ち親として成長していくための親支援のプログラム。

・挿絵が多くわかりやすい言葉で書かれたテキスト〔「行動」「心」「安全」「からだ」「親」、1995年に父親からの要望があり「父親」が追加された〕があり、場面に応じて使う。

・すすめ方はファシリテーターによる親グループのセッションで、ワークショップ形式で毎週1回、6回～8回を同じメンバーで行う。あくまでも参加者主体でテーマを決めファシリテーターは安心して話せる場づくりに努める。お互いの体験談や意見がお互いの学びの材料となり、違いに気づき、さらに自分はどうするのかを学習していく。

*ファシリテーターを養成する、トレーナーによる養成講座も行なわれている。4日間終日のプログラムで、現在日本では3つの団体が実施している。

<質疑>

Q：6回～8回を同じメンバーで行うということですが、意見を出し合ううちにどうしてもこの人とは一緒にやりたくない、というようなことがでてきたらどうするのですか？

A：ファシリテーターとしては、まずそういう意見を言ってくれたことに対して「発言してくれてありがとう」ということを伝えます。

最初にこのプログラムはお互いが違うことを認め合う場であることを確認することが大切です。それでもそういう意見が出た場合、途中ででも話しあって、「意見が違っていても人の言うことは最後まできちんと聞きましょう。」というような決まりごとを新たに決めるのもいいと思います。

とてもいやだと思うこと自体は「何がいやなのか？」「自分と何が違うのか？」を考えるチャンスで、ものの見方が豊かになるプロセスです。それぞれが人の意見で何かに気づき、最終的にお互いが「これでいいんだ」と思えるようになることが大切なのです。

意見をぶつけ合えるようになったということは、そのグループは成長したとも言えます。意見の違いは学びの幅を広げるチャンスと受け止めます。

体験談を話していく中で、問題が個別で深くて重たい、危険な状態というような場合は、グループからはずして個別に対応することもあります。



カナダのファミリー・ブレイスで紹介されていたテキスト。「親」と「心」

『Nobody's Perfect』体験プログラム報告

(この部分が今回体験した具体的な内容です)

1、アイスブレイカー：安心して話せる場所づくりのために行なう大切な時間。ここにおいて大丈夫とみんなが思えるようになるためにも第1回目はとても大事。

自己紹介： お互いが知り合いになる 共通点や違いに気づく

ペアで行ない、できるだけ多くの人と出会えるよう時間を切って次々と相手を変えて行なう。

今回は、まず握手をして「始めまして、 です」と自己紹介し、“朝ごはんは何を食べてきたか”を伝え合い1分間で交代した。

自己紹介が終ると一気に雰囲気や和みになりやすくなった。

2、決まりごと：この時間、みんなが本音で、対等・平等に発言でき、安心して居心地よく過ごせるための約束ごとを決める。

環境設定は大切で、動き回れるくらいの広さの部屋がよい。一人ひとりが居心地よい環境を話し合いみんなで決まりごとを決める。

例) 暑い、寒い、明るすぎる、暗すぎる、飲み物がほしい、席を自由に替わってよい人の話を最後まで聞く、など。

冷房を調整し、飲み物を飲んでいいこととした。

3、話し合いたいテーマを決める：今日みんなです話し合いたいことをそれぞれ意見を出して、話し合って決める。

「どうしてここに来たのか?」「何がしくて参加したのか」をカードに書いて共有し、それを見ながら、今日のテーマを決める。

今回の参加者は子育て世代が少ないことがわかったので、今自分たちが抱えている問題をいくつかカードに書いて皆で分類し、テーマをしぼっていった。

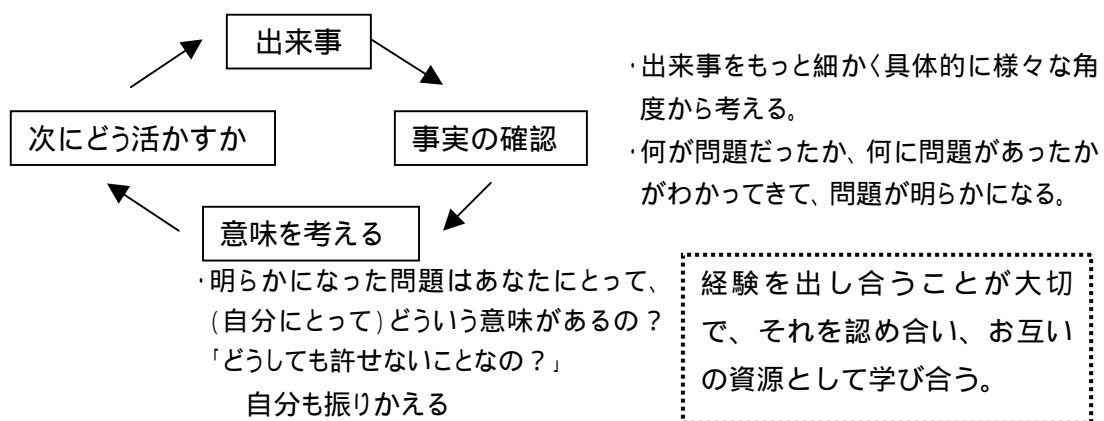
「生活クラブの活動で主体的な子育て世代の参加者はどうすれば出てくるか」「価値観のちがう人とコミュニケーションをとるにはどうすればいいか」の2つのテーマにしぼり、グループを2つに分けた。

【4、休憩：本当のプログラムではここで休憩を入れることが多い。】

5、話し合い：自分の体験や悩みを出し合う。人は誰でも体験したことから学べる。

(経験学習サイクル)

今まで生きてきて体験してきたことを出し合う。“経験学習サイクル”の手法を使って参加者の体験を聞き出す。



ここで感じた人とのちがいを、ちがいを認めることが理解されると、子育てに対しても他の子どもと比較をするのではなく、ちがいを認め、その子のいいところをほめることが必要だということに、つながっていく。

2つのグループでそれぞれ“経験学習サイクル”を使いながら、話し合いを進めた。

経験談を聞くことで、生活クラブやワークーズの活動においても、それぞれがおかれている環境やシステムのちがいがあることがわかったが、悩みの性質は似ているので、まず問題と感じていることを出し合い、それぞれが感じている問題に対して、原因はどこにあるのか、どうなればいい方向に向くのかななどの意見、アイデアを出し合った。

6、まとめ：今日の感想や役立つこと、やってみたいと思うことを出し合う。

全体を通して

「ノーバディーズ・パーフェクト講座の意義を学び、体験する」ということで、今までこの講座に参加する人以外、知ることのできなかつたプログラムの内容を体験した。参加者主体でテーマを決めるというところを忠実に行なったので、テーマが子育てから離れてしまったが、ファシリテーターによるグループセッションの手法が体験できたので、いろいろな価値観を持つ人が集まる話し合いの場所で使えることを実感。生活クラブの活動にも活かしていければよいと思う。

この講座は、自分とちがう人の価値観は無理やり変えることはできない、ということにまず気づいてもらい、お互いの体験談から学び合うことで、自分の価値観をこれがあたりまえではないのだということにも気づいてもらうための場面をつくっていくことがとても大事で、プログラムの舵取りをするファシリテーターの役割は大変重要。ファシリテーターの実力がこの講座の成否の鍵を握っているといえる。

回を重ね、気づきを繰り返して、徐々に人を認めることができるようになれば、それが子育てにもつながり子どもを認め受け入れることができるようになるだろうし、親の自信にもなっていくのだろう。

子育て支援の道具として、このような親のためのプログラムがあることを広げ、取り入れることを検討していきたいが、6~8回の連続講座であることやファシリテーターの確保などの課題もみえた。今回体験したことを持ち帰って、今後の活動に活かしていきたい。